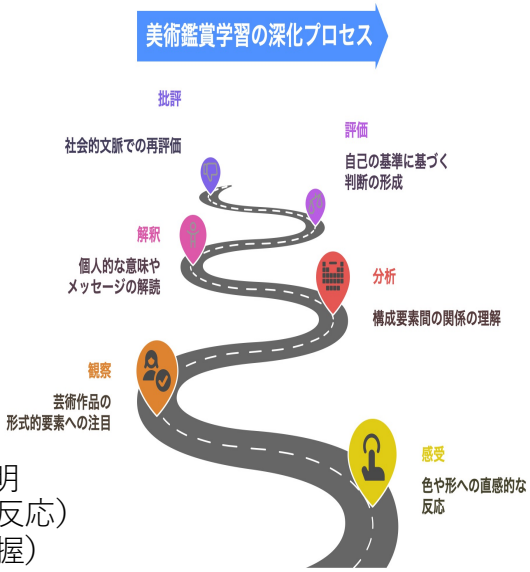
附属池田小学校　野網　学
多文化教育系　　田中　俊弥
理数情報教育系　山本　良太

図画工作科鑑賞学習における国語科との教育的アプローチの比較研究
―美術鑑賞学習の体系的分析からの示唆―

【研究の目的】
図画工作科鑑賞学習と国語科の教育的アプローチを比較し、図画工作科鑑賞学習の独自性を明らかにすることで、小学校教員が取り組みやすい鑑賞学習指導法の確立を目指す。

【研究の方法】
2000年から2023年までに発表された美術鑑賞学習に関する293編の研究論文をシステマティック・レビューにより分析。

【分析結果】
1．美術鑑賞学習の3つの枠組みと10のカテゴリー
[自身や他者との関わり]
① 鑑賞者の内面：形式的側面、内容的側面、経験、感情等
② 鑑賞者の発達段階：低学年、中学年、高学年の特徴
③ 対話を通した深まり：共有、発見、気づき等
[作品との関わり]
④ 表現領域との連携：相互、補完、関係等
⑤ 作品の内容や形式：焦点、構成要素、色彩等
⑥ 作品の背景や文脈：時代、文化、理解等
[指導法]
⑦ 教材・教具の活用：視覚、体験、模型等
⑧ 言語活動の活用：思考、整理、共有等
⑨ 振り返り：ワークシート、プロセス、評価等
⑩ 美術館との連携：学芸員、展示、ワークショップ等



美術鑑賞学習の6段階の深化プロセス 各段階の特徴を実証的に解明
1段階　感受：直感的・感覚的な反応（色や形への素直な反応）
2段階　観察：形式的要素への注目（細部の観察、全体把握）
3段階　分析：構成要素間の関係性理解（要素の役割考察）
4段階　解釈：意味やメッセージの読解（個人的な意味づけ）
5段階　評価：自己の基準での判断（価値判断の形成）
6段階　批評：多角的な再評価（社会的文脈での検討）

【研究の示唆】
・ 図画工作科における言語活動の特質 視覚的・感覚的な体験を言語化する過程で、形式的な文章力ではなく、造形要素への気づきや視覚的な認識の深まりを重視する必要性
・ 発達段階に応じた指導の可能性
　低学年：感受・観察を中心とした直感的アプローチ
　中学年：分析・解釈へと導く造形要素への注目
　高学年：評価・批評を含む総合的な鑑賞

【今後の展開 】
この分析結果を基に、葛飾北斎作《神奈川沖浪裏》の実践における両教科のアプローチを比較分析し、図画工作科の独自性をより具体的に明らかにする。